只見中学校2年生

会津若松市内・職場体験活動

只見中学校では、正しい職業観を身につけることや、働くことの意義・大切さを学ぶため、9月12日から14日までの三日間、会津若松市内で職場体験活動を行いました。

職場体験をした生徒は、2年生39名で国立磐梯青少年交流の家に宿泊しながら、市内の飲食店や大型販売店、幼稚園、保育園、美容室、結婚式場、福祉施設などの職場で様々な仕事を体験しました。この活動を受け入れた社会福祉法人会津婦人会保育園の小澤令子園長は「人と関わる仕事は難しいがやりがいがある。この仕事は絆が大切。ここでの経験を活かして人と関われる仕事を選んでほしい。只見で育った純粋な気持ちを忘れずに目標に向かって頑張ってください」と話されました。

会津婦人会保育園で職場体験をした吉津帆南さんに感想を聞きましたので紹介します。

2年1組　吉津帆南

私たちの職場体験先は山鹿町の婦人会保育園でした。体験したことは、0歳児の体温を計ったり、一緒にお昼ご飯を食べたりなど、保育士の先生方とほとんど同じ仕事を体験しました。特に、運動会の練習を一緒にしたことがとても楽しかったです。小さい子の世話をするのはとても大変で、どう扱って良いかわからなくて困ったときもありました。それでも、5歳児の女の子が、いつも私に話しかけてきてくれて、とても可愛いのと同時に嬉しかったです。3日間大変でしたが、子どもたちの寝顔には癒されました。勉強することもたくさんありました。保育士の先生方、お世話になりました。

広報ただみ診療所

『終末期医療とは』

朝日診療所　医師　若山　隆

今回のお話は終末期医療のお話です。

終末期医療とは重い病気の末期で不治と判断されたとき、治療よりも患者の心身の苦痛を和らげ、穏やかに日々を過ごせるように配慮する療養法です。

延命治療は進歩しており、回復の見込みがなく意識のない患者の生命もある程度の長きにわたって維持することも可能になっています。とはいえ、回復の見込みのない意識状態のまま、点滴や管などにつないで生きながらえさせられることを望まない考えもあります。延命治療を受けるかどうか、その場で自分の意思を表明できればいいが、認知症・病気・事故によって意思決定できない（自分で決めたり、それを伝えたりできなくなる）場合がほとんどです。これまでは、本人の意思が不明確のまま、医療者・家族で医療的な決定を行ってきましたが、これからは本人の意思を尊重することが望ましいとされてきています。考えがはっきりしている元気なうちに、終末期医療をどこまで受けたいかをあらかじめ意思表示しておくことが大切なのです。

たとえば、不治の病、あるいは老衰により口から食事が食べられなくなった場合についてです。口から食事が食べられなくなった場合、そのままでは栄養失調に陥ります。水分がとれたとしても、栄養なしでは余命は1ヵ月前後と考えられます。

その場合、たとえば経腸栄養（経口摂取が不可能あるいは不十分な患者に対し、体外から消化管内に通したチューブを用いて流動食を投与する）という方法があります。胃ろうといって、胃に栄養を送るための小さな管をおなかにつくって、外から胃に栄養剤を流します。この方法を用いれば、栄養失調で亡くなることはありません。

皆さんは、寝たきりで、意思表示できない状態で、この延命処置を希望されますか？希望されませんか？

元気なうちに、はっきり意思を示しておかないと、いつのまにか体中が管だらけで生かされているだけ・・・なんてことにもなりかねませんよ。